

 **東京芸術座**

《名作劇場》

上演作品紹介

since 1959

名作劇場のあゆみ

劇団東京芸術座は、戦前の築地小劇場の時代から日本の新劇運動の旗手として活躍してきた演出家・村山知義を代表とする新協劇団と、俳優・薄田研二を代表とする中央芸術劇場とが合同して、1959年に結成されました。

私たちは創立の翌年から、情操教育の一助となる演劇を全国の青少年に届けるため、名作劇場（学校公演）を開始しました。

1960年当時、少数の学校のみで実施されていた芸術鑑賞教室は、その後先生方と創造団体との努力と連携によって全国に広がってゆきました。

しかしながら今日、学校を取り巻く諸般の事情から子どもたちの舞台芸術を鑑賞する機会が減少しています。

“芸術”は青少年の感性や教養を深め人生に豊かさをもたらすために必要不可欠です。

私たちは、これからも名作劇場の活動を続けてまいります。



東京芸術座 公演

未来

原作：重松清

「未来」(「カカシの夏休み」所収)文春文庫刊

脚色・演出：北原章彦



スタッフ

美術 / 幡野 寛

音楽 / 洪 栄龍

照明 / 諸橋忠司

効果 / 馬上真勝

舞台監督 / たかのきよこ

表紙絵・デザイン / オザワミカ

企画協力 = 文藝春秋

登場人物

笹岡みゆき (19歳)

笹岡政人 (15歳)

笹岡慎二 (父)

笹岡雅子 (母)

増岡 (新聞記者)

武田 (医師)

長谷川正樹

生徒A (みゆきの同級生)

生徒B (みゆきの同級生)

生徒C (みゆきの同級生)

前田リポーター

浅野記者

事務局長 (慟哭の会)

手塚新造 (慟哭の会)

手塚恵美子 (慟哭の会)

先生 (みゆきの高校の担任)

あらすじ

わたしの趣味はボランティアだ

わたしはいい人になりたい

笑えなくてもいいから

誰かのために泣いてあげられる人になりたい

高2の夏、わたしはたいせつなものをなくしてしまった

「日記か手紙を書いてみませんか？」

大学病院のお医者さんからのアドバイス

「ほんとうの気持ちを一言でもいいから書いてみませんか？」

わたしは、日付も宛名もない文章を書いてみることにした

あの日から3年の月日が流れていた

昨晚

弟の同級生が自らのちを絶った

弟の名前が書かれた遺書をのこして

原作者：重松清氏インタビュー

重松 清



1963年 岡山県生まれ 早稲田大学教育学部卒 出版社勤務をへて著述業に
1999年 「ナイフ」で第14回坪田譲治文学賞受賞
1999年 「エイジ」で第12回山本周五郎賞受賞
2001年 「ビタミンF」で第124回画木賞受賞
2010年 「十字架」で第44回吉川英治文学賞受賞
2014年 「セツメツ少年」で第68回毎日出版文化賞受賞
その他の主な著書に「流星ワゴン」「とんび」「その日のまえに」など
2016年から早稲田大学文化構想学部教授（任期付き）

— いじめを題材とした小説を書かれたきっかけを教えてください

(重松) 子ども時代は転校を繰り返していたから、新しい学校に入ると人間関係に敏感にならざるを得なかった。そこで見えたものがいじめの原風景かな。それとフリーライター時代、ニュータウンの塾で団塊ジュニアの子どもたちを教えたんだけど、子どもたちのリアルな生活に接しているといじめを含む人間関係が見えてくる。一番難しい友だち関係としていじめを捉えたことだね。

— 「未来」ではいじめの当事者ではなく、傍観者を主人公として描かれていますが

(重松) いじめる側ではなく、いじられる側でもないけれど、傍観者は無関係ではあり得ないよと。複雑な構図、人間関係を描きたかった。

— 「未来」というタイトルに込められた思いを教えてください

(重松) 単純にいじめにフィードバックするのであれば「未来」というタイトルは付けていない。この小説を「文壇」に発表したときのタイトルは「あなたが生きなかった未来」だった。単行本にするときに「未来」にしたんだけど、それはいじめ云々ではなく「心ならずも生きられなかった人の未来が、僕たちが生きている今日なんだよ」ということを言いたかった。それはいじめで命を絶った少年の未来であり、昨日病気で亡くなった人の未来でもあるわけ。作家としては、一回り大きなね……死んでしまった人の未来を生きているんだという意識を持ちたいねって。助けられなかった友だち、戦争で亡くなった、原爆で亡くなった人たちが、僕たちが見殺しにしたとは言わないけれど、傍観していて助けられなかった友だちの未来を生きているんだよって思いからだね。今日を踏ん張るときに必要なものは希望だと思うのね、明日に希望がないということとは未来も否定されてしまう。今日酷いことがあったから死んじゃうってこと以上に、明日もまた酷いことがあるだろうと思うから死んじゃうんじゃないかな。未来を否定されたときに命を絶つかもしれないと、取材したり子どもたちに接することで感じた。いじめに限らず、子どもたちから未来を、希望を奪っちゃいけないと思う。子どもたちは閉ざされた教室の中でね、明日もいいことがないって思うことがほんとに辛いやことだと思うよ。

— 今の時代のいじめと、ご自身の子ども時代との違いを感じますか？

(重松) 古き良き時代とか、昔のほうがおおらかだったなんて少しも思わない。昔は子どもたちのいじめ以前にハンディキャップを抱えている人への意識や母子家庭への意識だったり、社会的弱者へのいじめの構図があったから、子どもたちのいじめが目立たなかっただけじゃないかな。

— 以前「何かを残したい」と書かれている記事を拝読しました、その思いは東日本大震災を経験して変わりましたか？

(重松) 「未来」を執筆した20年前は、自分の子どもたちがいじめで命を奪われたり未来を信じられなくなるような苦しみに会わせたくない切実な問題だったけど、何が言いたかったかと言えば死んだ人たちの生きられなかった未来を生きているんだよということと言いたかったわけで、それは3.11を取材してきて一層強くなったね。一瞬のうちに2万人以上の命が奪われた、その人たちの思いを背負って2018年生きているんだという思いがね。

— 生きているって幸せだと思える瞬間を教えてください

(重松) 明日起きたら、何をやろうと思えることが幸せだと思う。飯が美味しく食べられてぐっすり眠れることが幸せだと思うし、僕だったら小説を書こうと思えることが幸せだと思う。明日を楽しみにおやすみなさいと言えることが幸せじゃないかと思うね。若い人には「自分の明日を信じて生きて行けることは幸せなことなんだよ」と伝えたいし、そこから逆算して言えることは、いじめの問題があったり、震災の記憶があったり、戦争が未来を強引に断ち切り憎しみの連鎖がお互いの未来を断ち切ったということだと思う。未来には希望があってほしいよ、そういう世の中であってほしい。僕が「未来」を最初に書こうと思った根っこにあったのもそこだし、それはいじめの問題を超えたもので、20年経っても自分の根っこにあるものなんですよ。

— ありがとうございます

いじめ問題に向き合って

教育評論家 臨床教育研究所「虹」所長
法政大学特任教授

尾木 直樹



「子育てと教育は愛とロマン」「学校は安心と失敗と成長の場」が信条。
滋賀県生まれ。早稲田大学卒業後、私立海城高校、東京都立中学校教師として、22年間子どもを主役とした創造的な教育を展開。その後大学教員に転身して22年、合計44年間教壇に立つ。それらの成果は200冊を超える著書（監修含む）、DVD・ビデオソフト、映画類にまとめられている。
「尾木ママ」としてテレビや講演会活動などで広く親しまれている。

【中・高生の皆さんへ】

もしかして、あなたは今、いじめに悩んでいるかもしれないね。いじめられてる？ まさか、だれかをいじめている？ それとも、友だちへのいじめを見ているだけで、止められなくて悩んでいる——？

現代のいじめは、「いつでも、どこの学級でも・どんな理由で起きてもおかしくない」。どの子がターゲットになっても不思議ではないのが特徴なんだ。小学4年から中学3年までの6年間に、いじめの被害者、加害者になった経験がある児童生徒の割合は、2015年度はいずれも約90%（「いじめ追跡調査2013-2015」国立教育政策研究所調査）。そもそも、いじめは特定の人だけの問題ではない。だから、我慢したり、自分一人で乗り越えようとしなくていいんだよ。

いじめは、解決することが一番大切なんだ。まずは学校の先生やお父さん、お母さんなど信頼できる大人に話してほしい。いじめがひどくなる心配や、自分がいじめのターゲットになるんじゃないかという不安も大きいかもしれないね。でも、そんな不安も含めて、まずは大人に話してみよう。解決はそこからスタートするんじゃないかな。

そして、いじめは、加害者がいるから始まる。やっている方は「遊び」や「ふざけ」「いじり」だと思っても、相手が嫌な思いを抱いたら、それは「いじめ」なんだよ。

では、人間はなぜ、いじめをするのか。いじめの心理を考えることも大事だね。いじめの最大の原因は、やはり「ストレス」。自分が辛い思いをしていると、大人だって、いじめとまではいかなくても、いやがらせをしたくなる気持ちになることもある。ストレスが少ない学校や家庭、社会をどうつくっていくのかは、君たちだけでなく、大人も含めた現代の社会全体の大きな課題だね。

さて、学校ではどんな取り組みができるだろうか。子どもが主役になった楽しい学校づくりは、足立区立辰沼小学校の「辰沼キッズレスキュー」活動など、全国に優れた先駆的実践例があるよ。子ども主体で、先生方や学校の協力、保護者や地域のサポートがあれば、正義が通り、いじめが起きてみずぐに解決できる学校になるはず。

いじめ問題は、一つひとつ乗り越えていく中で、人の心の痛みがわかる感性が磨かれ、解決する自分たちに自信を持つことができ、友達への信頼感を深めることもできる。それが人間の成長にもつながるのです。

いじめなんかには負けないで。一緒に楽しい学級・学校を創っていきましょう！

【学校関係者、保護者の皆さんへ】

近年、日本におけるいじめ問題への社会の対応は、目覚ましく進んでいます。大津中2いじめ自殺事件が契機となり、2013年に「いじめ防止対策推進法」が成立・施行され、文科省のこれ以上ないほどきめ細かいガイドラインも整備されました。法施行後は、第三者委員会を立ち上げ、被害者や家族の気持ちに寄り添った解決をめざす事例も増えてきました。一方で、依然として教育委員会などの行政や校長など学校関係者による隠蔽、加害側が弁護士を雇うなどしながら加害行為を正当化したり、責任逃れの言動をとる等、被害者や家族がさらに深く傷つけられる事例が後を絶ちません。法に実効性を持たせていく必要を感じます。

そんな折に、正面からいじめに対峙する作品「未来」が東京芸術座で上演されると知り、私は希望と期待が胸がいっぱいです。

演劇は私たちの感情にダイレクトに訴えかけてくれます。クラスや学校で、いじめを題材にした劇を通していじめ問題を深く考え直すことは、スマホなどネットを通じたバーチャルな人間関係に慣れた現代の子どもたちに、いじめとは命の問題であり、みんなで向き合い取り組んでいくべき大切な課題なのだ気づかせてくれるはずですよ。伝統ある専門劇団の舞台を鑑賞しながら、いじめのない明るく安心でき、誰もが伸びる学校を子どもたちと共に創ってほしいと願っています。

長谷川くん。

これが、あなたの生きなかった 十九年と二百十二日めの未来。



— 三年前、それまで一度も話したことのない
同級生の長谷川くんが電話をかけてきた。

クラスメイトの自殺に巻き込まれたみゆき

「おれ死んじゃうからさ、笹岡、
おまえはずっと生きろよな」



— あのときから、わたしは笑うこともできないし、泣くこともできない。

弟の同級生の赤堀くんが自ら命を絶った 見つかった遺書には弟・政人の名前だけが書いてあった



過熱する報道 理由もわからないまま加害者になってしまう家族



あの時以来 3年振りに訪れた高校

「もうすぐ三年になるだろう。先生はさあ、
けっこう忘れていたんだ 長谷川のこと」
「ひょっとしたら長谷川、お前にずーっと
覚えていてもらいたくて電話したのかもな」



政人の名前だけが遺書に書かれていた理由が明らかになる

— 忘れてない。
わたしあの人のことを一日だって忘れたことない。



「赤堀くん、遺書を全部で三十七通
書いてたんですよ。クラス全員分の」

— これで最後のお別れなんだから、
行かなきゃ、ほんとだめなんだよ。



赤堀くんの最後の列れに向かう二人

— 政人はずっとあなたのことを忘れない。



30日振りに訪れた大学病院

— わたしは、いい人になりたい。
なれなくてもいいから、
なりたいと願っていたい。



原作/神品正子 演出/印南貞人

チャレンジ・ド
Challeng-ed

— 遠い水の記憶 —

水泳は敵と戦うスポーツじゃない
自分自身と戦うスポーツだ



スタッフ

美術/幡野 寛

照明/矢口雅敏

効果/中嶋直勝

衣裳/山田靖子

音楽/川本 哲

振付/熊谷 章



あらすじ

ロンドン・オリンピックの平泳ぎ種目でメダルを期待されていた高橋は、代表選考会を兼ねた日本選手権で予期に反して三位にとどまり、オリンピック出場のチャンスを逸する。競技者としての将来を思い悩んでいたところ、盲学校・校長から保健体育の教師として奉職し、「視覚障がいの生徒たちに水泳を教えてほしい」と懇願される。

教職につきながらも心の奥底に挫折感を秘めた高橋、「悪意なき同情」に反発する傷つきやすい心を持った生徒たち。高橋は自身の人生を見つめ直すため、自分の学んだことを生徒たちに伝えるために、再び日本選手権にエントリーする。そんな高橋に生徒らが共感し信頼を寄せはじめる・・・

登場人物

長島校長

原教務主任

高橋洋信

林 豊

中京学園教師

小宮山豆腐店夫婦

鈴木一郎

松野亮子

増田 恵

木村宅也

篠崎宏子

中京学園生徒



前を向いて歩きましょう！

バルセロナ・オリンピック 200m平泳ぎ
金メダリスト

岩崎 恭子



2回のオリンピック出場の後、私にはそれぞれ辛い時期がありました。バルセロナで金メダルを取った後の中学3年から高校1年の二年間の記憶が私にはありません。無意識のうちに辛い記憶を消し去ってしまったのです。私は何も変わっていないのに、私を取り巻く環境がすべて変わってしまい、私のことで家族にも迷惑を掛けてしまう「金メダルなんか取らなければよかった」と思い悩みました。

アトランタが終わった後には、精神的に競泳を続けていくことができなくなりました。そんなころ知人の紹介で、愛知県の障がい者水泳大会にゲストとして参加させていただく機会がありました（その後も何度か参加しています）。私のまわりに障がいを持った人がいなかったこともあり、正直大変ショックを受けました。参加者のなかにはこの子は命がすくないのよと聞かされ、翌年の大会にはその方はいらっしやいませんでした。

このような経験や「競泳だけが人生じゃないんだよ」ってまわりの人から励まされ助けられたことで、前を向いて歩けるようになりました。

このお芝居の主人公高橋先生は競泳で光るものをもちながらも、オリンピック出場を逃してしまいましたが、盲学校の生徒を指導することで高橋先生自身忘れていたことを、生徒によって思い出させてもらいます。オリンピックに出場できなかったことを後ろ向きに引きずることなく、自分の道を見つけ前向きに歩いていく高橋先生、ハンディキャップに立ち向かう生徒達に心からエールを送りたい。これから私自身もいろんなことで悩んでいくだろうけど、競泳を続けたことで学び得たことで、どんな困難でも絶対に乗り越えられる自信が私にもあります。

観劇される皆さんに私の経験から伝えたいことは、「何かひとつでいいから、自分のやりたいことを見つけてほしい。やりはじめたことを途中で投げ出さないでほしい。」できないから止めてしまえばそこで全て終わってしまいます。続けることで何かが発見できるはず、高橋先生と一緒に前を向いて歩いていきましょう！

やればできるは魔法の合い言葉

視覚障がい者・演技指導 山城 完治

日本中をさわやかにした済美高校（第76回センバツ高校野球-初出場・初優勝）のあの校歌。よしおれもと思ったのは私だけだろうか。エラーをしてもにこにこ見守る監督とともに、のびのび・目標に向かってたたかう姿がとても印象的だった。どうせの対局ではないだろうか。

「障がい者の社会への全面参加と平等」が初めて世界の課題となったのは、1981年のこと。閉鎖と不平等からの開放の世界的な歴史は、まだ23年である。2人に1人が駅ホームから落ちている。横断歩道の場所・信号の色・渡る方向もわからず歩かなければならない。銀行の預金通帳には点字がない、いくら預けているのか知らされない。東京都などの障がい者を雇う試験で点字受験を認めない。視覚障がい者を取り巻く日本社会の現状は、まだここなのだ。そのことだけをみれば、どうせ・・・といいたくなる。しかし、時間をおって考えてみると、どうせのままではない。「せめてスタートラインに」「歩むべき道を保障してほしい」の私たちの運動は、ゆっくりながら確実に社会を動かしている。可動式ホーム柵は、落ちない駅ホームを実現する。交通信号に音があれば不安は軽減される。郵便貯金には、点字の通帳がある。国家公務員では、点字受験が認められている。私たちの運動と歩みは、目の前にぶらさがってくるどうせをけとばすことではないだろうか。

情報の8割、しかも物事の前提となる情報、決め手となる情報は視覚情報だ。私たちの社会参加・平等の道のりはたやすくはない。そのことだけを見てじっとしていると、私の中のどうせが大きくなっていく。しかし、幅広く見る私、おれだってと思う私がこれに立ち向かう。

（初演パンフレットより）

劇場はもう一つの人生の学校

日本演劇教育連盟 副島 功

作者は、難問題を提起している。「泳ぐ場面が欠かせない水泳選手の話、どう舞台化すればいいの？」と。

舞台で水泳競技を実際に再現することは不可能ではないか？ しかも視覚障がいをもつ子どもに泳ぎを教えるとは？ 私も同じ思いで期待して開演を待った。

これまで舞台化されたことのない「水泳」。泳ぐ人々をめぐるの人生のドラマ。

バルセロナ・オリンピック（1992年）の予選-日本選手権200メートル平泳ぎ。主人公の高橋と林の競泳が舞台で演じられる。泳ぎながらの激しい内心の対話。

絶対に勝てる（タカハシ）／勝てるかもしれない（ハヤシ・以下繰り返す）／追いついた／追いつかれた／いける、いける／僕はいける／僕はいける／タッチした。折るような気持ちで、僕は電光掲示板を見上げた。

隣のコースの選手との緊張した瞬間。作者は、他のスポーツにない水泳の独特の感覚を捉えている。一度しかない青春の美しいシーンである。

また、盲学校の先生になった高橋と、水泳部の生徒鈴木との対話。鈴木は同級生の女生徒にも、先生に対しても生意気で反抗的である。高橋は根気強く彼とつきあう。飛び込みは「いやだ」という鈴木に対して「飛び込みは素晴らしいぞ。水と一つになる瞬間だ」という高橋のひと言。

このシーンに、この劇のテーマが示されている。教師は部の活動は生徒の自主性に任せるが、大切なことははっきり相手に言う教師と生徒との関係、またここでの「教育」のありようともいえるだろう。鈴木は成長する。鈴木は「平泳ぎが好きだ。前に進む時、額に水の流れを感じる。その感じが好きなんだ。」私も共感する言葉だ。

劇場はもう一つの人生の学校だ。学校の体育館とか地域のホールとか舞台の条件はさまざまであるが、「劇場」は多くの生きるための知恵を汲みとらせてくれる。高橋、林、鈴木・・・私の内部に新しい人間像が生み出されている。



ばかばかしい。
体育なんてやって、意味ないじゃん。



悪意のない同情くらい、不快なものはないだよ。



いいですか、一番大切なことは、何か。
愛です。



だから、堂々と、健常者の中に入って戦えばいいじゃないか。



先生、鈴木君をそうやって、
世間にさらしたいんですか。

Challeng-ed

— 遠い水の記憶 —

水泳は、敵と戦うスポーツじゃない。

敵を倒して勝つスポーツじゃない。

自分自身と戦うスポーツだ。

彼はここで、何かを感じてくれるだろうか。僕はそれを願いながら泳ぎきった。



人生で大切なことは、何を成し 遂げたかではなく、どう生きたかではないか。
自分を苦しめていたものが、どんなに小さな、とるにたらないものであるかということに気付いたのです。



体が動いても、心が動かなければ、オリンピックには行けないと思ったんだ。



障がいがなかったら、いい選手になれるのに。
障がいがあったって、なれるさ。



出場させてください。……僕でも、出場できますか。

先生の体に触らせてもらってもいいでしょうか。



芸術鑑賞会のスタイル

芸術鑑賞会には様々な形態がございます。
学校のご希望や状況に合わせて公演を行うことができます。

地域の公共ホールでの実施



本格的な音響・照明設備を備えています公共ホールでの公演は、高い演出効果をもって作品をお届けすることができます。ご要望があれば、ホールの手配もいたします。

学校体育館での実施



授業時間の確保や交通手段など、様々な事情により校外での芸術鑑賞会の実施が難しいという学校のお話を伺っています。そういった際には、学校体育館での公演も可能です。

【上演内容のご案内】

	未来		Challeng・ed	
上演会場	公共ホール	体育館	公共ホール	体育館
舞台設営	4時間	5時間	4時間	5時間
上演時間	1時間30分		1時間45分	
舞台撤去	1時間	1時間30分	1時間	1時間30分
照明設備	ホール設備	機材持込	ホール設備	機材持込
音響設備	ホール設備	機材持込	ホール設備	機材持込
運搬車輛	トラック1台(4トン)		トラック1台(4トン)	

※舞台設営・撤去にかかる時間は、ホールや体育館の状況により多少前後いたします。

<作業風景>



大道具や機材をトラックから体育館に運び入れます



大道具や機材をフロアに広げて設営の準備をします



照明を吊り、舞台装置を組んでいきます



全ての準備が整いましたら、間もなく開場です

《名作劇場》上演作品

- ミハルコフ作 うぬぼれ男 1960
- 木下順二作 狐山伏 1960
- モリエール作 守銭奴 1961
- トルストイ作 イワンの馬鹿 1961
- ゴーゴリー作 結婚 1962
- 村山知義作 初恋 1963
- モリエール作 スカパンの悪だくみ 1966
- ゴーゴリー作 検察官 1967
- J・バルビー作 はだしの貴族 1970
- ゴーリキー作 どん底 1972
- V・ユーゴー原作 レ・ミゼラブル 1973
- 早乙女勝元原作 関口潤脚色 小麦色の仲間たち 1973
- シェイクスピア作 ヴェニスの商人 1974
- 小林多喜二原作 大垣肇脚色 蟹工船 1975
- 村山知義作 ベートーヴェン 1976
- 大橋喜一作 銀河鉄道の恋人たち 1977
- 勝山俊介作 回転軸 1977
- 山本茂実原作 大橋喜一劇化 あゝ野麦峠 1978
- 関根庄一編著 寺島アキ子脚本 翼は心につけて 1979
- 山本周五郎原作 結束信二・川池丈司脚色 赤ひげ 1981
- 本田英郎作 勲章の川 1982



ゴーリキー作
「どん底」
(1972年～)



吉村昭原作
「ふおん・しいほととの娘」
(1985年～)



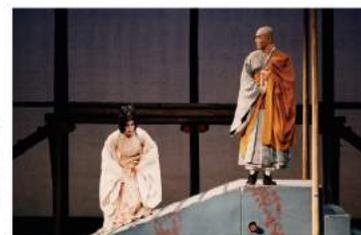
シェイクスピア作
「ヴェニスの商人」
(1974年～)



レジナルド・ローズ作
「12人の怒れる男たち」
(1986年～)



山本茂実原作
「あゝ野麦峠」
(1978年～)



本田英郎作
「野望の系譜 - 壬申の乱 -」
(1989年～)



山本周五郎原作
「赤ひげ」
(1981年～)



湯本香樹実原作
「夏の庭 - The Friends -」
(2000年～)



本田英郎作
「勲章の川」
(1982年～)



神品正子原作
「Challeng-ed - 遠い水の記憶 -」
(2005年～)

- 1984 松谷みよ子原作 橋本栄子脚色 私のアンネ=フランク
- 1985 吉村昭原作 本田英郎劇化 ふおん・しいほととの娘
- 1986 ジュール・ルナール作 にんじん
- 1986 レジナルド・ローズ作 12人の怒れる男たち
- 1989 本田英郎作 野望の系譜 - 壬申の乱 -
- 1989 斎藤惇夫原作 平石耕一脚本 冒険者たち
- 1989 安藤美紀夫原作 さねとうあきら脚本 ワメコがふたり
- 1995 大橋喜一作 あわて暮やぶけ芝居 東京空襲3・10
- 1996 リリアン・ヘルマン作 小池美佐子訳 The Children's Hour - 子供の時間 -
- 1997 乾一雄構成 あの日 私は
- 1998 平石耕一作 ブラボー！ファール先生
- 1999 平石耕一作 News News - テレビは何を伝えたか -
- 2000 湯本香樹実原作 夏の庭 - The Friends -
- 2003 旭爪あかね原作 平石耕一脚本 稲の旋律
- 2005 神品正子原作 Challeng-ed - 遠い水の記憶 -
- 2006 金城一紀原作 いずみ源脚本 GO
- 2006 レイモンド・ブリッグズ作 いずみ源脚本 風が吹くとき
- 2008 ジョン・スタインベック原作 杉本孝司脚本 はつかねずみと人間
- 2010 山本周五郎原作 川池丈司脚色 赤ひげ
- 2011 さねとうあきら作 おれはなにわのライオンや
- 2012 湯本香樹実原作 夏の庭 - The Friends -



 **東京芸術座**

〒177-0042 東京都練馬区下石神井 4-19-11
TEL 03-3997-4341 FAX 03-3904-0151

E-mail : tg@tg-za.com
<http://www.tokyogeijutsuza.co.jp>